

# SNS におけるメキシコ・ナショナリズムの否定的な諸側面： 2020 年東京五輪大会におけるナショナリズムと外国人排斥表現の談話分析

ジャネス・フアン・アントニオ<sup>1</sup>, ロメロ・イサミ<sup>2</sup>

(受付：2023 年 3 月 17 日, 受理：2023 年 6 月 30 日)

Dissenting Dimensions of Mexican Nationalism in Social Network Services:  
A Discursive Analysis of Nationalism and Xenophobic Expression at Tokyo 2020 Olympics

Juan Antonio YÁÑEZ<sup>1</sup>, Isami ROMERO<sup>2</sup>

## 摘 要

東京オリンピック 2020 年大会で史上初めてメキシコ的女子ソフトボール代表チームが参加した。そのほとんどの選手が二重国籍であった。当初、国内メディアは注目していなかったが、SNS 上で多くのメキシコ人のユーザーが代表チームを応援していた。本稿では、メキシコ・オリンピック委員会のツイッターの公式アカウントにユーザーが投稿したコメントの談話分析を行い、代表選手の二重国籍の性質をめぐる論争に注目した。その結果、2つの正反対なナショナリズムの表現を確認することができた。1つは、二重国籍選手を自国の誇りと認識するタイプであった。もう1つは拒絶反応を示す排他的なものであった。これらは双方とも日常のナショナリズム [banal nationalism] の表現である。すなわち、ユーザーは SNS 上で日常生活における自己アイデンティティを定義し、外部の世界と関係を持っていたことを意味する。

キーワード：メキシコ、ナショナリズム、談話分析、二重国籍、ソフトボール

## はじめに

国際オリンピック委員会 [International Olympic Committee, IOC] は、1996 年のアトランタ大会で初めて

女子ソフトボールを正式種目に採用したが、2008 年の北京大会以後、このスポーツを正式競技から除外した。しかし、2016 年に 2020 年の東京大会（新型コロナウイルス感染症の影響で翌年に開催）において IOC は、開催都

<sup>1</sup> 南山大学外国語教育センター

<sup>1</sup> Foreign Language Education Center, Nanzan University.

<sup>2</sup> 帯広畜産大学人間科学研究部門人文社会・言語科学分野

<sup>2</sup> Division of Humanities, Social Sciences and Linguistic Sciences, Department of Human Sciences, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine.

連絡先：ロメロ・イサミ, [romero@obihiro.ac.jp](mailto:romero@obihiro.ac.jp)

市が正式種目を追加できることを認め、日本でも人気が高い女子ソフトボールが正式競技になった。その結果、福島あづま球場と横浜スタジアムの2つの会場で、開催国の日本女子代表チームを含む6カ国の代表チーム（米国、メキシコ、カナダ、豪州、イタリア）がオープニングラウンド（予選リーグ）に参加した。

メキシコの場合、女子ソフトボール代表チームがオリンピックに参加するのは初めてであったが、15人の選手のうち、メキシコ生まれは1人だけであり、残りは米国出身であった。その多くは父親と祖父がメキシコ出身であり、「メキシコ系の名字」を持っていたものの、スペイン語を話せる選手はほとんどいなかった（Pereyra, 2021）。中には、投手のダニエラ・オトゥール [Danielle O' Toole] や野手のスザンナ・ブルックシャー [Suzannah Brookshire] のように「米国系の名字」を持っている選手がいた。

なぜ、このようなことが起きたのだろうか。その理由は、国内の女子ソフトボールの長い敗北の歴史が関係していた。過去にメキシコ女子代表チームは世界選手権に参加したことがあったものの、2012年の大会では最下位に終わり、次の2014年の大会ではアメリカ大陸予選で敗退していた。これを受け、メキシコ・ソフトボール連盟 [Federación Mexicana de Sóftbol, FMS] は、チームの強化プロジェクトを立ち上げたが、国内にはレベルの高い選手がいなかった。結局、FMSはメキシコ系アメリカ人の女子選手を採用し、そのほとんどが米国の大学のスポーツシステムを経験していたものであった（Pereyra, 2021）。

周知のように、米国は日本と並び世界のソフトボールの強豪国であり、現在、5000万人のメキシコ人がこの国に在住している（吉野・山崎, 2022）。代表になれなかったメキシコ系アメリカ人の選手は、メキシコ女子代表と

して世界選手権に参加できる可能性があった。

以後、この新しい体制の下でメキシコは2016年大会に参加し、代表チームは5位に終わった。そして、同年にIOCが女子ソフトボールのオリンピック競技復帰を決定すると、FMSはメキシコ系アメリカ人を軸にした代表チームでオリンピック参加を目指すことにしたが、ここで大きな問題が生じた。各選手は代表する国や地域の有効なパスポートを保有することが必要条件であった。これを受け、メキシコ系アメリカ人選手はメキシコ国籍の獲得を申請した<sup>1</sup>。これはあくまでも書類審査であり、スペイン語の能力の条件はなかった。

こうして、二重国籍選手で構成されたメキシコ女子代表チームは、2019年のアメリカ大陸予選を1位で通過し、念願のオリンピック参加を実現した。しかし、当初国内メディアは、ソフトボール女子代表チームの歴史的なオリンピック参加にスポットライトを向けなかった。東京オリンピックの正式種目であった男子サッカーや男子野球に比べて女子ソフトボールは人気がなく、飛込競技やテコンドーのようにメダルを獲得できる競技でもなかった。このメディアの無関心はオープニングラウンドでも続いた。メキシコ代表チームは第1試合のカナダ戦と第2試合の日本戦で敗北し、第3試合の米国戦も同じ結果となった。

しかし、SNS上では多くのユーザーが女子ソフトボール代表チームを応援していた。この声援は、第4試合のイタリア戦と第5試合（予選最終試合）の豪州戦の勝利後、さらに活発になり、メキシコ女子代表チームが銅メダル決定戦まで進むとピークを迎えた。

ここで興味深いのはユーザーの応援の形であった。ユーザーはスポーツ観戦独自のナショナリズム表現をSNS上で書き込んだが、その際に選手の二重国籍の存在に焦点を当てた。その結果、彼女たちの「非メキシコ人」

---

<sup>1</sup>メキシコ合衆国政治憲法第30条によると、メキシコ国籍は出生 [nacimiento] または帰化 [naturalización] により取得できる。出生は、親の国籍を問わずメキシコ国内で生まれた者、あるいはメキシコ国外で生まれ、両親の少なくとも一方がメキシコ人（出生または帰化による）であるものを意味する。一方、帰化は、メキシコ政府から帰化承認書を受け取ったものである。なお、同憲法32条で二重国籍を正式に認めている。

の特徴を指摘した。中には自分の国を代表する英雄であると表現するユーザーが存在したが、選手が「米国生まれのメキシコ人」であることを批判するものもいた。結局、銅メダル決定試合でカナダと対戦し、2-3で敗北したものの、SNS上では選手を評価する声が多数存在した。

ところが、試合終了後、ある事件が大きな波紋を呼んだ。2人のメキシコの子ボクシング選手が、女子ソフトボール代表チームの選手が使用したユニフォームを選手村のゴミ箱で見つけた。透明な袋には、開会式で行進のときに着用したメキシコ代表選手団公式服装も入っていた。ボクシング選手は袋の写真とメッセージを投稿し、スキャンダルは直ちにSNSで拡大した。FMSは、荷物が多くスーツケースに入りきれなかったためゴミ箱に捨てたと表明したが、ユーザーだけでなく、国内メディアもソフトボール代表チームの選手を強く非難した。これを受け、メキシコ・オリンピック協会 [Comité Olímpico Mexicano, COM] はこの行為に対する懸念を正式表明した。COMはまた、調査を実施し、ユニフォームを捨てた選手に対して厳しい処分を与えることも約束した (Redacción 2021)。

以上、ソフトボール女子代表チームは、短期間でメキシコの誇りから国の恥になった。これは、ナショナリズム研究が定義している日常のナショナリズム [banal nationalism] の事例である。ただし、従来の先行研究は、スポーツにおけるメキシコの日常のナショナリズムを十分に分析していない。その意味で、今回の事例を検証するのは意義がある。

そこで本稿では、ソフトボール女子代表チームをめぐる論争を軸に、日常のナショナリズムの表現がどのようにSNS上で展開したのかを説明する。その際に、言語学の1つのアプローチである談話分析を使用する。

## (1) 問題提起

近年、スポーツ選手の国籍問題は、各国で論争を巻き起こしている。無論、日本も例外ではない。最も有名な

のがテニス選手の大坂なおみをめぐる論争である。日本の国籍法によると、多重国籍の日本人は、22歳に達するまでに国籍を選択する必要がある。大坂の場合、彼女は1997年に日本で生まれたが、父親が米国出身であったことから2つの国籍を持っていた。そのまま、二重国籍を維持する選択肢はあったが、オリンピックに参加したい場合、どちらかの国籍を選ぶことが不可欠であった。結局、2019年に大坂は日本国籍を選択するものの、国内メディアやSNSで彼女のアイデンティティを必要以上に批判する声が多く、最終的に大坂を精神的に追い込むという問題が生じた。

他にも、日本に帰化したサッカー選手の李忠成の例がある。法律上は日本人であるが、特に李の場合、在日韓国人であることからSNSでヘイトスピーチの被害を受けた。野球では、2023年1月、栗山英樹監督が同年3月のベースボールクラシック [World Baseball Classic, WBC] にメジャーリーグのラース・ヌートバー [Lars Nootbaar] 外野手を日本代表として選んだ。日系アメリカ人選手の選出は初めてであり、WBCの出場資格は日本国籍を求めないので、米国籍を維持することができた。SNS上では、彼の実績を評価する声があるものの、日系アメリカ人であることを非難する声もあった。

では、メキシコの場合は、スポーツ選手の国籍問題は、どのような論争に発展してきたのだろうか。

まず、野球の事例を見てみよう。メキシカンリーグ [Liga Mexicana de Béisbol] は、7人の外国人選手の登録を認めている。ただし、リーグ内のメキシコ系アメリカ人の選手に対してメキシコのパスポートを保持した場合、外国人選手ではなくメキシコ人選手としてプレーできることを認めている (Garza Campos, 2017)。さらに、代表レベルでは、メキシコ野球連盟 [Federación Mexicana de Béisbol] はWBCを含む国際大会において、日本でプレーしているブランドン・レアード [Brandon Laird] のようなメキシコ系アメリカ人選手や二重国籍選手を代表に選出している。この動きについて国内メディアは否定的に評価している。一方、ファンは、このような選手のことをポチョ [Pocho] と呼んでいる。従

来、ポチヨは軽蔑用語であり、スペイン語をうまく話せないメキシコ系アメリカ人を意味することから二重国籍選手が差別を受けていることが分かる。

メキシコで最も人気が高いサッカーの場合、問題は複雑である。二重国籍選手の場合、メキシコとのきずなが強いことからメキシコ選手の道を選ぶものもいる。しかし、出身地の国の代表チームでプレーできないことを理由に「ランクが低い」メキシコ代表チームを目指して代表選手の道を進むものもいる。この現象について国内メディアは、能力の高い選手を歓迎するものの、そうとは言えない選手には批判的である。そしてさらに大きな波紋となってきたのがLIGA MX（メキシコ・リーグ）でプレーする帰化選手の存在である。多くは南米出身の選手であり、比較的簡単である帰化申請を通じてメキシコ国籍を取得する。代表選手になるケースもあり、リアル・マドリッドのスター選手であったウゴ・サンチェス [Hugo Sánchez Márquez] のように、愛国主義が強い元選手やスポーツ評論家は、帰化選手の選出を強く批判してきた (Garza Campos, 2014)。

以上、野球やサッカーの事例を見ると、メキシコ生まれではない選手に対して国内メディアがあまり評価していないことが窺える。ただし、ここで注目すべきは、誰がメキシコに属し、誰が属さないかということは決して新しい問題ではないことである。長年間のメキシコのスポーツ新聞や国内メディアに存在する現象である。

歴史家のベレムンド・カリージョ＝レベレス [Veremundo Carrillo Reveles] によると、1940年代以前のメキシコ社会には、メキシコ国民という概念が複数存在していたが、1945年の大統領法令<sup>2</sup>を機に、少なくともスポーツ・メディアにおいて、誰がメキシコ人であり、誰がそうでないかという議論が明確になった。そし

て現在でもなお、国内メディアのみならず、街頭やSNSではその論争は続いている (Carrillo Reveles, 2016: 67)。

以上のことから分かるように、人々は明確に自分たちのナショナル・アイデンティティに関する概念を共有し、自分たちと違うものを差別化している。問題は国際大会になるとこのような論争が、ナショナル・アイデンティティの悪い部分を強調することである。本研究で取り上げるソフトボール代表チームへのリアクションが正にその例である。しかも、過去とは異なり、現在、ナショナリズムの表現の多くはSNSのようなデジタル空間で起きていることから、この問題を改めて問い直す必要がある。

なお、ナショナリズムについては多くの研究が存在するが、その中でも、政治学者ベネディクト・アンダーソン [Benedict Anderson] (1991) は、報道機関やマスメディアが歴史的に人々の（ナショナルな）想像を供給してきたことを指摘している。一方、多くの先行研究は、ナショナリズムを一般的に国家 [state] と結びつけた社会的・政治的運動に伴う言語活動や言説と関連付けている。メキシコの場合、ナショナリズムの研究は、スペイン植民地時代の遺産と先住民文化の間に存在する複雑な関係の議論を進めると同時に、19世紀から20世紀にかけてエリート層がどのように植民地の遺産と先住民文化の要素を利用しながら国家の確立とその結束を実現したのかを分析してきた (O' Farrill, 2010)。

また、メキシコの研究ではないが、国家やエリート層ではなく、日常に焦点を当てた研究も存在する。社会心理学者マイケル・ビリッグ [Michael Billig] (1995) は、これを日常のナショナリズムと定義している。その際に、何げない日常生活、すなわち人々にとって当たり前のものの、既に理解されているものの重要性を強調し、国民共

<sup>2</sup>1945年、メキシコ政府は、当時の連邦区（現在のメキシコシティ）でプレーするプロチームにおける外国人選手の参加を制限する大統領令 [Decreto Ávila Camacho] を発布した。当初、バスケットボールのチームを想定しており、外国人選手は4人しか同時にプレーできなかった。のちに、サッカーや野球にも使用したが、2005年まで法令は有効であった。この政令の歴史と詳細、および報道で生じた論争については、Carrillo Reveles (2016) で確認することができる。

共同体 [nation] の特徴と形成の説明を試みている。日常のナショナリズムは、誰もが行う集団的思考の一部であり、それは人々のルーティンの一部でもある。したがって、共同体のメンバーの信念、表象、実践などが形成するネットワークを分析する必要がある (Billig, 1995)。

以上を踏まえて、本研究の事例である女子ソフトボール代表チームが巻き起こした論争に同じロジックを適用すると、スポーツイベントを観戦し、SNS上で意見を述べるという日常的な行為において、国民共同体がいかに社会的に構築されているのかを見るのが可能である。本研究では、SNS上における人々のディスコースを分析する。具体的に自分たちが誰であるのか、自分が住む世界はどのようなものなのか、そして他者とどうかかわり、何が重要なのであるかをいかにして表現しているのかを説明したい。

## (2) 先行研究

国際スポーツ大会は、国民共同体のアイデンティティが問われる特別な空間である。競技に参加する瞬間、各国の選手は自分たちが属する国民共同体への帰属を再確認し、他国のライバルと自分を区別しながら、所属する国民共同体の文化的・歴史的・社会的要素を再生産する (Edensor, 2002; Bowes and Bairner, 2019)。サッカー選手がゴールを決めたときに、代表チームのユニホームにある自国の連盟のエンブレムにキスをする瞬間がその例である。もう1つの事例は、陸上選手がオリンピックでメダルを獲得したときに、国旗を背中にまとう瞬間である。ただし、国民共同体への帰属を再確認するのは決してアスリートの特権ではなく、観戦しているサポーターやファンもできることである。

本研究では、所属する国民共同体の文化的・歴史的・社会的要素の再生産をスポーツ・ナショナリズム [Sports Nationalism] と定義する。今日、スポーツ・ナショナリズムは、スポーツ競技場のみならず、インターネット上でも見ることができる。しかも、かつては新聞やテレビなど一般メディアが国民共同体への帰属の再確認の役割を担っていたが、現在ではSNSを通じてユーザーという個人が主体となっている (Szluca, 2017)。つまり、既存のメディアだけでなく、様々なアクターがスポーツ・ナショナリズムを表現している。

ここまで、スポーツ・ナショナリズムについて述べてきたが、次にメキシコのナショナリズムの研究が日常のナショナリズムをどのように取り上げてきたのかを説明したい。

現時点において、日常のナショナリズムを用いた研究はほとんど存在しないが、それに近いのがカルロス・エルナンデス＝グティエレス [Carlos Hernández Gutiérrez] (2009) の研究である。エルナンデス＝グティエレスは、国内テレビがどのように、メキシコのサッカー代表チームを国民共同体のシンボルにしたかに焦点を当て、サポーターのアイデンティティの変容を分析した。結論を簡潔に述べれば、メキシコのテレビ局は、代表の試合を放送するたびに、映像、音声、テロップ、解説などを通じて、サッカー選手や監督を巻き込む伝説、神話、偉業を語り、彼らを英雄化してきた。したがって、視聴者は（架空であっても）メキシコという国民共同体を表す概念を共有することになる (Hernández Gutiérrez, 2009)。

ここで興味深いのは、国内のテレビ局が再現してきた物語である。周知のように、サッカーのメキシコ代表チームには国際的な栄誉がほとんどなく、ワールドカップの歴史の中で最も多くの敗北を喫しているチームである<sup>3</sup>。とはいえ、代表チームには、数少ないものの、歴史的な

<sup>3</sup>1999年に、メキシコA代表はコンフェデレーションズカップを優勝した。FIFA公認の世界大会で獲得したタイトルはこれが唯一である。また、これに加えて、オリンピック男子代表チームが2012年ロンドンで金メダル、2020年東京では銅メダルを獲得した。またU-17ワールドカップでは、メキシコ代表チームが2005年、2011年と2回優勝している。

勝利や英雄になった選手の記録が存在する。このような物語の蓄積は、メキシコのメディアが形成してきた日常のナショナリズムのシンボルである。

思想家アーネスト・ルナン [Ernest Renan] が指摘しているように、どの国も壮大な物語、すなわち、複数の記憶の遺産を維持しており、それによって過去が現在とつながっている (Renan, 1990: 20)。ここで言う現在は、それに先立つ努力、犠牲、献身の集大成である。この論理にしたがえば、国民共同体を維持しているのは英雄の偉業であり、その栄光は未来においても続くことになる。

スポーツの場合、栄光の物語が国民共同体を形成するナショナリズムの原動力であるととらえることができる。しかも、その物語は特定のグループが独占しているものではなく、誰でも手が届くものである。また、物語を私的に所有することは可能であり、自分が持っているデジタルツールを通じてインターネット上に再現できる。

最後に、直接的な先行研究ではないが、スポーツにおける日常のナショナリズムを理解するために、スポーツ社会学者アリー・ボウズ [Ali Bowes] とアラン・ベアナー [Alan Bairner] の研究について言及したい (Bowes and Bairner, 2009)。

両氏は、スポーツ競技が国民共同体を想像するための象徴的な空間の場所を構築していると考えている。それを説明するために、英国の女子アスリートに注目し、一部の選手が自国のユニフォームを着ることで特定のナショナル・アイデンティティを獲得していることを指摘している。ユニフォームを着た選手は英雄だけでなく、英国の代表者となる。そして、自国の国旗に身を包むことで観客とライバルに自分の存在を見せられる。

また、ボウズとベアナーは、女子アスリートが国民共同体を演じる女優になるため、競技中に使用しているユニフォームの色とパフォーマンスが共同体のアイデンティティのパフォーマンス [performance of national identity] になることを指摘している。この場合、女子アスリートが着ているユニフォームが日常のナショナリズムを象徴する。一方、その姿を見た人々はユニフォー

ムが自分と同じものであると考え、国のエンブレムとして認識する。

なお、本研究において、ボウズとベアナーが指摘するユニフォームの存在は重要である。前述したように、銅メダル決定戦試合後、敗北した女子ソフトボール代表チームは、ユニフォームをゴミ箱に捨てた。ボウズとベアナーの研究のロジックから、この行為は、自国の国旗を捨てたことを意味し、SNS 上での批判の理由を説明できる。

### (3) 方法論

本研究では、メキシコのソフトボール女子代表チームをめぐるスポーツ・ナショナリズムを明らかにするために、SNS 上においてメキシコのユーザーがどのようにナショナリズムを表現したのかを分析する。ただし、すべての SNS のプラットフォームを分析するのは困難である。そこで本研究では、ツイッターに焦点を当てた。その中でも、東京オリンピックの期間中にメキシコ選手の活躍の情報を定期的に発信した COM の公式アカウント (@COM\_Mexico) を分析対象に選んだ。その理由は、COM の公式アカウントには、オリンピック以外の情報がなく、簡便に投稿のモニタリングできるためである。また、COM のツイートに他のユーザーもコメントを投稿でき、一般の人々の反応を知ることができることも、その理由の 1 つである。

以上を踏まえて、本研究では、COM の公式アカウントが投稿した 5 つのツイートを取り上げ、他のユーザーが投稿したコメントを分析した (表 1)。無論、すべてのコメントを掲載するのは困難である。したがって、分析の論点を裏付けるのに最も有用なコメントのみを使用した。ちなみに、コメントは原文のスペイン語のまま書き起こし、構成、文法、綴りの間違いは修正していない。そしてこれらのコメントを日本語で訳したが、スラングなど口語的な表現が多いため、日本語でその意味が十分に伝わらない可能性があることを付言しておきたい。

表1 COMアカウントの投稿

	投稿日	投稿	コメント数
1	2021.7.22	En un dramático partido que se decidió en extra innings, Japón se impuso 3-2 a México, en la segunda jornada del torneo olímpico de softbol de Tokio 2020 (2020年のオリンピック大会の2日目、試合は劇的な延長戦で決着がついた。日本が3-2でメキシコに勝った)	39
2	2021.7.25	Blanquea México a Italia en el torneo olímpico de softbol (オリンピックソフトボール大会で、メキシコがイタリアに圧勝した)	17
3	2021.7.26	¡Van por medalla! México se impuso 4-1 a Australia y esta noche (23 hrs. Tiempo de la CDMX) jugará contra Canadá el partido por el bronce en el torneo de sófbol de los juegos olímpicos. (メダル獲得へ！メキシコは豪州4-1で破り、今夜（メキシコシティ時間23時）、オリンピックソフトボール大会の銅メダルをかけてカナダと対戦する予定)	36
4	2021.7.27	Canadá se llevó la medalla de bronce en el softbol de los Juegos Olímpicos Tokio 2020 al vencer 3-2 a un aguerrido equipo de México (2020年東京オリンピックのソフトボール大会で、カナダはタフなメキシコを3-2で勝利し、銅メダルを獲得)	64
5	2021.7.30	COM inició una investigación contra SoftbolMX (COMはソフトボールチームに対する調査を開始した)	115

出典：COMの公式アカウントの情報から筆者作成

なお、コメントの内容を分析するために、本研究では、1) 言語、2) 言語が可能にする言語活動、3) 言語が調達する直示 (deixis)、4) 言語が展開するシンボルなどの要因に焦点を当てた。これらは、カルチュラル・スターディーズ研究者ウカシュ・シュルツ [Lukasz Szulc] が指摘している日常のナショナリズムが表面化する伝統的な形態をもとにしている (Szulc, 2017)。

最後に、ユーザーのコメントにあった「felicidades campeonas」[おめでとーチャンピオンたちよ] のような表現は、社会的に登場人物、物語などを構築する能力があると判断した。さらに、このような表現は、女子ソフトボール代表チームに対する同意、妥協、拒否、判定などといった社会行動の分析にも使用可能である。

## (4) 分析

### 4.1 国民共同体の祝福の表現

前述したように、東京オリンピック大会の開幕以前、国内メディアは、メキシコのソフトボール女子代表チームの歴史的なオリンピック参加にスポットライトを向けず、チームは無名の存在であった。しかしながら、オープニングラウンドが始まると、チームの活動はSNS上で広まった。多くのユーザーは、代表チームの情報を十分に持たず、ソフトボールという競技もよく知らなかったが、それにもかかわらずエールを送った。

ツイッターの場合、COMの公式アカウントを中心にメキシコの国民共同体の祝福という現象が起きた。つまり、ユーザーが投稿したツイートやコメントには極めて強い

ナショナリズムの表現が存在した。

なぜ、このようなことが起きたのだろうか。その理由は次のように説明できる。メキシコ人は日常生活においてスポーツ観戦を非常に好み、自国を代表するチームを応援する傾向がある。これは、サッカー、野球、バスケットボールのような人気のあるスポーツだけでなくソフトボールのように、人気の乏しいスポーツでも起きる。

もちろん、このような現象は日本でも起きているが、日本とは異なり、サッカーと野球を除いてメキシコのチームが団体競技の国際大会に参加することはほとんどない。その意味で、国内メディアが女子ソフトボールの存在を無視していたとしても、多くのユーザーにとってこの競技は魅力的であった。結局、サッカーと同様に観戦し、応援し始めた。さらに、もう1つ重要な点を指摘する必要がある。それは、これまでとは異なり、インターネットで（違法であっても）試合を見ることが可能になったことである。つまり、今までの国内メディアのフィルターがなくなり、ユーザーは自由に、そして好きな時間に試合を観戦することができた。

なお、応援の仕方を分析した結果、サッカー代表を応援するときを使う表現が数多く見ることができたが、独自のものもあった。ここで、以下の3つの例を紹介したい。

#### コメント1

PST: Y pensar que había quienes las descartaban luego de su arranque complicado...  
Ellas merecían la victoria desde hacía mucho, hasta que llegó!  
Esto ya es histórico, pero vamos por más!  
VAMOS MÉXICO! AQUÍ NADIE SE RINDE!  
[困難な立ち上がりの後に、彼女たちには無理だと言っていた人がいたことを考えると...  
彼女たちは前々から勝てる力をもっていたが、勝利はついに来た  
これは歴史的なものであるが、もっと上を目指そう  
レッツゴー・メキシコ！ここでは、誰もあきらめ

ていない]

#### コメント2

ITM: Eso!!!

Vamos México!

Hagan historia

[それだ!!!

行けメキシコ!

歴史を作れ]



#### コメント3

OLV: ¡Gran triunfo para México! Escobedo cada juego se ve mejor, solo recibió un hit y logró lanzar el juego completo; además, el bateo llegó por fin en la selección, y se demostró que la ofensiva ya no sólo recae en una o dos mujeres, sino que todas puede hacerlo, y de gran manera  
[メキシコにとって大きな勝利だ！試合が進むにつれてエスコベドは良くなっている。ヒット1本しか許さなかった。完投を果たした。また、代表のバッティングもついにキタ、そして、攻撃面では、1人や2人の選手の責任ではなく、全員ができる、しかも、ちゃんとできる]

これらは、7月25日に代表チームが待望の初勝利を収めた第4試合のイタリア戦の後にCOMの公式アカウントに投稿したコメントであり、自国の代表としてオリンピックに出場したチームへの忠誠とサポートを表明したものである

まず、コメント1とコメント2を分析してみよう。ここで重要な点は、どのユーザーも「Vamos México!」（行け、メキシコ!）というフレーズを入力し、換喩的な役割 [metonic function] を作動している。つまり、ユーザーは「選手」や「代表チーム」という言葉を使わず、「México」という言葉で書き換えることで、ユーザー自身が属している国民共同体を表している。しかも、COMの公式アカウントにコメントした他のユーザーも、この



発話行為を繰り返している。これが正に日常のナショナリズムを形成している。

一方、コメント3の場合、ユーザーは、イタリア戦のデータに言及している。そして、最初に出てくるフレーズ「¡Gran triunfo para México!」（メキシコにとって大きな勝利だ！）を見る限り、選手を国民共同体のメンバーとして迎え入れ、その存在を受け入れていることが分かる。

以上、この3つのコメントを見る限り、COMの公式アカウントは、ユーザーが互いに自分の意見を述べる空間となったことが分かる。また、「Vamos México!」は、サッカー代表などを応援するときに使用する典型的なフレーズであり、スポーツ観戦においてユーザーが文化的にそれを学習してきたことが窺える。他に指摘する点は、ツイートを分析すると、メキシコという国民共同体を再現する2つの言語活動を確認することができた。これについて説明を行いたい。

#### a. ネットにおける国章の表示行動

最初に注目すべきなのは、国章の表示行動である。このような行動には様々な形態があるが、本研究の分析のために、Billigが定義している国民共同体の旗を振ること [flagging the nation] という概念を使用したい (Billig, 1995)。ここでは特に国旗の使用に注目する。

国旗は国民共同体の存在を象徴する機能を果たしている。スポーツの場合、国旗は国際大会という空間で使用され、そこで愛国心を高めることに貢献している。この現象は、分析したコメントでも見ることができる。ユーザーは、女子ソフトボール代表チームをツイッター上で応援するときに、様々な形でナショナルカラー（緑、白、赤）を使用した。コメント2がその例である。このユーザーは、コメントに加えてソムブレロ（帽子）やマラカスといったメキシコのステレオタイプのGIF画像を投稿している。このようなタイプのツイートは、デジタル空間において国民共同体を祝う新たな手法としてとらえることができるが、今までスタジアムや公共の場で実行

してきた象徴的な機能を再現していることが分かる。

#### b. 英雄物語の共同構築

国民共同体のアイデンティティを支えるのが想像上の過去と現在を結びつける物語である。特に、英雄を主人公にした物語が多く、これはその人物の努力と犠牲を語っている。本研究では、これを英雄物語 [heroic story] と定義する。このような要素は、最初に分析した3つのコメントには存在しないが、第2試合の日本戦の敗戦後にユーザーがCOMの公式アカウントに投稿したコメントで見ることができる。

#### コメント4

DVD: En verdad se la rifaron. Esperemos que sigan así

[本当に体張って頑張ったよ。次の試合も同じ様にやってくれることを期待しよう]

#### コメント5

BMS: Lucharon hasta el último momento. Felicidades

[最後まで闘ったね。おめでとう]

周知のように、日本の代表チームは、女子ソフトボールの強豪国であり、米国とともに金メダル候補のチームであった。したがって、メキシコ女子代表チームが日本に負けることは誰もが想定していた結果であったが、試合は延長戦にまでもつれこんだ。最終的にメキシコ代表チームは敗北したが、格上の相手でも勝てるかもしれないという可能性を印象づけた。そして、そのパフォーマンスを高く評価したユーザーは存在し、選手を英雄化した。それを象徴するのがコメント4とコメント5である。

コメント4の場合、ユーザーは「se la rifaron」（体を張って頑張った）というフレーズを入力した。これはメキシコのスラングであり、危機的な状況における勇敢な行為について述べるときに、頻繁に使用するものである。一方、コメント5の場合、ユーザーは「lucharon

hasta el último momento] (最後まで闘ったね) というフレーズを入力している。これを通じて、メキシコ女子代表チームに粘り強さを感じさせると同時に、「闘う」という動詞が壮大な英雄物語を語り、ソフトボールの試合を選手が繰り広げる勇敢な闘いの場として見立てている。

#### コメント6

ORB: Este partido me puso de nervios. Si que supieron estar al nivel de Japón  
[この試合は本当にナーバスにさせてくれた。日本と同じレベルで戦えた]

#### コメント7

RJR: Super chingonas! Se perdió con la frente en alto, gran esfuerzo, gran partido! O' Toole se rifo cañón!  
[最高だよ、この女たちは! 負けたけど、悔いはないね。すごい努力、なんてすごい試合だったのだ。オトゥールはメチャクチャ体を張ったね]

最後に、英雄物語の共同構築としてコメント6とコメント7の例を取り上げてみたい。コメント6の場合、「Si que supieron estar al nivel de Japón」(日本と同じレベルで戦えた) というフレーズがあり、ユーザーはライバルの強さを認めているが、メキシコ女子代表の強さも指摘している。つまり、敗北したものの、試合の内容には満足した姿勢を見せ、選手を祝福の価値があるものとしてとらえている。一方、コメント7の場合、「se perdió pero con la frente en alto」(負けたけど、悔いはないね) というフレーズは、努力の末に敗北したことで、国民共同体のメンバーとしてユーザー自身が敗北を冷静な目で見ることができることをアピールしている。



以上、4つのコメントは、選手に勇敢さ、粘り強さ、冷静さ、強い敵に立ち向かう能力があったことを指摘し、それを美德としてとらえている。そして、このような言

語活動によって、ユーザーは選手がメキシコという想像上の共同体にふさわしい地位にいることを示し、英雄物語を構築したのである。

#### c. 代名詞選択における国民共同体の境界の拡張

言語学において、代名詞選択 [pronominal selection] という概念がある。これはディスコースにおいて「集団的な私」を構築し、その中に、発言者と対象となるグループの両方を取り込む言語作用である。今回の女子ソフトボール代表チームの場合、ユーザーは選手を自分が所属する国民共同体の一部として抱きしめた。このような行動は、オープニングラウンド初戦(メキシコ代表チームが0-4でカナダに敗北した試合)の以下のコメントで見ることができる。

#### コメント8

BGL: Que orgullosos nos hacen sentir. Canadá nos venció por muy poco. Estoy seguro de que hoy por la noche se puede obtener un mejor resultado y una medalla histórica. VAMOS QUE FALTA LO MEJOR.   
[どれだけ誇らしいことか。カナダは私たちに小差で勝った。今夜はもっといい結果を出して、歴史的なメダルを獲得できると確信している、それ行け、これから本番だ 

#### コメント9

MXJ: Muy buen juego de mis mexipochas, a darlo todo en lo que resta del torneo.  
[おれのmexipochasよ、とてもいい試合だったよ、残りの大会の試合は全力でやれよ]

コメント8の場合、ユーザーは「Canadá nos venció por muy poco」(カナダは私たちに小差で勝った) というフレーズを入力した。0-4という結果がわずかな差であるのかは別として、ここで重要なのは、スペイン語の

代名詞「nos」（私たちに）を使用していることである。これによって、ユーザーは、ソフトボール代表チームが自分と同じレベルのものであり、同じ国民共同体の一部であることを認めている。

一方、コメント9の場合、ユーザーは「Muy buen juego de mis mexipochas」（おれのmexipochasよ、とてもいい試合だったよ）というフレーズを入力した。このフレーズは、2つの言語活動を同時に行っていることで興味深い。1つは女子代表チームのパフォーマンスを高く評価している。もう1つは、所有詞「mis」（私の）を選択することによって、発言者は、発言の対象となる主体（選手）に親密さを構築している。しかも、ユーザーは「mexicanas」[メキシコ人女性たち]とpochas[女性のポチャたち]を組み合わせた新語「mexipochas」を使っている。既に述べてきたように、ポチョという単語は、メキシコ系アメリカ人に対する差別用語であるが、この単語に接頭辞「mexi」を付けることで、ユーザーは従来のネガティブな意味合いを中和している。また、選手の二重国籍の存在を認め、親しみを込めてポジティブにとらえている。

#### 4.2. 拒絶反応の表現

ここまで、どのようにツイッターのユーザーがメキシコ女子ソフトボール代表チームを通じて「国民共同体」を祝福した様子を紹介し、SNS上におけるスポーツ・ナショナリズムの表現について分析したが、選手に対して拒絶反応を見せたユーザーもいた。中には、選手のパフォーマンスを否定するものに加え、彼女たちが「真のメキシコ人」であることに疑問をあらわにした。

##### コメント10

FFT: No porque es femenino, mejor hubieran llevado a mexicanas

[女性チームだけの理由で、メキシコ人女子選手を連れていけばよかった]

##### コメント11

JPN: La selección extranjera de México

[メキシコの外国人代表チーム]

まず、上記のコメントから見てみよう。コメント10の場合、ユーザーは「mejor hubieran llevado a mexicanas」（メキシコ人女性選手を連れていけばよかった）と入力している。ここでは、たとえ法的にはメキシコ人であっても、二重国籍選手がメキシコというカテゴリーに所属していないことを成文化している。一方、コメント11の場合、ユーザーは「La selección extranjera de México」（メキシコの外国人代表チーム）と入力している。これは矛盾を伴う表現である。すなわち、選手はメキシコ人と外国人という同時の性質を持つことはできないことから、彼女たちには自分の国を代表する正統性がないことを、皮肉を込めて表現している。

以上の例で重要なのは、ユーザーが言語行為を通して、国民共同体の境界を狭くして選手がメキシコの一員であることを否定し、彼女たちを排除していることを裏付けている。なお、このような暗黙の了解に加えて、ツイッターには選手を排除する傾向があり、国民共同体の境界を制約する3つの形態が存在した。

##### a. メキシコ人の美德の否定

##### コメント12

NHM: Así es yo no me siento orgullosa de este equipo ya que ninguna es mexicana no jugaron con garra, coraje y corazón como las otras corrupción mugre corrupción 🤔🤔🤔

[「そうだよ、私はこのチームに対して誇りを持っていない。なぜなら誰もメキシコ人ではない。だから他の人と違って、力、勇気、ハートを持ってプレーしなかった。すべては腐敗、みにくい汚腐]

コメント12の場合、ユーザーは「ninguna es mexicana」（誰もメキシコ人ではない）と入力している。

ここで、選手に対して明確に拒絶反応を示しているが、「メキシコ人ではない」ということをどのように裏付けているのかがポイントである。

このコメントは代表チームが第2試合の日本戦に惜敗したときのものであり、試合の展開もまた強い否定をもたらすほどの内容ではなかった。ただし、ここで注目したいのはユーザーの性別である。スペイン語では、補語となる形容詞は主語である名詞の性を反映するが、ここでは「私は」[yo]の補語である「誇りをもって」[orgullosa]が女性形となっているので、ユーザーは女性である。つまり、発言者と選手は女性というアイデンティティを共有している。その点が敗北を許せなかった理由なのかもしれない。

またユーザーは、選手には「力、勇気、ハート」がなかったことを強調している。この3つの要素は、英雄物語で主人公のロマンチックなイメージを構築するときに、使用する美德である。つまり、犠牲にしてまで国民共同体のために自分をささげる行為を意味し、このような美德がないと国民共同体の英雄にもなれず、そのメンバーにもなれない。この論理に従うと、ユーザーは、選手にメキシコ人の美德がないことを指摘し、ソフトボール代表チームのメキシコ人の性質を奪っている。さらに、拒否反応は、「como las otras」(他の人)というフレーズがある。これは、「真のメキシコ人」すなわち、メキシコで生まれた二重国籍ではないものを意味している。

#### コメント 13

MRB: No es Mexico hay que aclararlo, es la selección C de EU sólo una habla español y conoce México, las otras sólo aprovecharon las facilidades de ir a una olimpiada ya que en su país EU nunca lo hubieran logrado  
[明確にいわなければいけないよ、これはメキシコではないよ。米国のC代表だよ。スペイン語を話し、メキシコを知っているのは1人だけだよ。その他はオリンピックにいける有利な条件を自分たちの都合によって使っただけだよ。なぜなら自分たちの国

である米国では、絶対にそれ(オリンピックに参加すること)はできないから]

メキシコ人の美德を認めないコメントは他にもあった。コメント13がその例である。ユーザーは、「sólo aprovecharon las facilidades de ir a una olimpiada ya que en su país EU nunca lo hubieran logrado」(オリンピックにいける有利な条件を自分たちの都合によって使っただけだよ。なぜなら自分たちの国である米国では、絶対に可能できないから)と入力しているが、選手を米国というメキシコと違うカテゴリーに位置づけている。同時に、選手の御都合主義を訴えている。つまり、選手は二重国籍という特権を利用して、本来は絶対に参加できないオリンピックに出場できたことを指摘している。

#### コメント 14

MRB: Lastima que es mexicana por conveniencia y no por orgullo  
[残念ながら彼女は、御都合主義のメキシコ人だよ。誇りをもったメキシコ人ではない]

コメント14は、日本戦で投手を務めたため選手を絶賛するコメント「Que buena pitcher es O' Toole」(オトゥールはなんていい投手なんだ)に対して投稿したものである。ユーザーは、「Lastima que es mexicana por conveniencia y no por orgullo」(残念ながら彼女は御都合主義のメキシコ人だよ。誇りを持ったメキシコ人ではない)と入力している。つまり、ここで述べたいのは、自分のように「真のメキシコ人」が持っている性質とは違い、女子ソフトボール代表の選手は自分のアイデンティティを偽り、メキシコ人としての誇りを持たずにオリンピックに出場することで、詐欺を働いていることを訴えている。

## b. 国土、言語、歴史の関係

よね]

改めて、コメント13をもう一度取り上げたい。ユーザーは、「No es Mexico hay que aclararlo es la selección C de EU sólo una habla español y conoce México」(明確にいわなければいけないよ、これはメキシコではないよ。米国のC代表だよ、1人の選手だけがスペイン語を話し、メキシコを知っているよ)というフレーズを入力している。ここで、ユーザーは「真のメキシコ人」の条件を示している。まず、メキシコが米国ではないことを指摘した後、「真のメキシコ人」になるには、メキシコで生まれ、そこに住まねばならないことを強調している。次に、「真のメキシコ人」としてもう1つの条件である言語(スペイン語)を選手が話せないことを指摘し、彼女たちのメキシコ人の性質を全否定している。したがって、ユーザーは自分のことを「真のメキシコ人」であると定義し、選手と自分を明確に差別化している。このパターンを違う言語活動のツイートでも見ることができた。

### コメント15

ABC: Yo tengo una pregunta y es ¿En serio no hay mujeres mexicanas que jueguen softbol? Casi todas son nacidas en Estados Unidos con papás mexicanos ¿Tan necesario se tenía que recurrir a esa vía?

[自分は1つ質問があるよ。本当に、ソフトボールをプレーするメキシコ人女性はいないのかね。選手のほとんどが米国で生まれ、親がメキシコ人だよ。そこまでしてやるべきだったのかね]

### コメント16

NJM: Creo que ninguna es mexicana, sino hijas de mexicanos en Estados Unidos. Como sea, una bonita historia.

[誰もメキシコ人女性ではないね。米国にいるメキシコ人の娘たちだよ。どうでもいいけど、いい話だ

コメント15の場合、ユーザーは、「¿En serio no hay mujeres mexicanas que jueguen softbol?」(本当に、ソフトボールをプレーするメキシコ人女性はいないのかね)と入力している。二重国籍選手は、メキシコ生まれの選手と同様にメキシコ人女性であるので、この発言はその事実を全面的に否定しており、メキシコ人女性全員に対する差別発言でもある。そして、ユーザーは、自分がした質問に「Casi todas son nacidas en Estados Unidos con papás mexicanos」(ほとんどが米国で生まれ、親がメキシコ人であるよ)と答えている。これは再びメキシコ合衆国憲法が定めている国籍条件を無視して、二重国籍の存在を軽視している。一方、コメント16の場合、ユーザーは「ninguna es mexicana, sino hijas de mexicanos en Estados Unidos」(誰もメキシコ人女性ではないね。米国にいるメキシコ人の娘たちだよ)と入力している。これも先ほどのコメント15と同様である。憲法上の条件を無視し、「真のメキシコ人」はメキシコで生まれたものに限定している。この2つのコメントからは、個人がどの国に所属するかを考える上で、国土を重視していることが分かる。

最後に、ユニフォームのスキヤンダル後に、7月30日にCOMが公式アカウントで投稿したツイートにコメントしたユーザーの意見を紹介したい。

### コメント17

LNH: ellas orgullosas portarían esos uniformes (Liga a Facebook watch: ELLAS SON LAS AMAZONAS Es el equipo de softbol de Yaxunah cuyas integrantes juegan descalzas y portando orgullosamente su hipil)

[彼女たちなら誇りを持ってそのユニフォームを着るだろう (Facebook Watchのリンク: 彼女たちはアマゾンである。ジャシュナのソフトボールチームである。そのメンバーは裸足とイピルを着て誇りを持ってプレーしている)]

ユーザーは、「ellas orgullosas portarían esos uniformes」（彼女たちなら誇りを持ってそのユニフォームを着るだろう）の後にFacebookのリンクを貼っている。そこには、ユカタン州のジャシュナ・アマゾン [Amazonas de Yaxunah] というソフトボールのチームのビデオがある。このチームの選手のほとんどが先住民のマヤ部族の女性であり、スパイクを使用せず、普通のユニフォームではないイピル [hipil]<sup>4</sup> というメキシコ・中米南部の民族衣装を着てプレイしている。今回のユーザーは、他のユーザーとは異なっていた。国土や言語の否定ではなく、メキシコの歴史を軸に二重国籍選手のメキシコ人の性質を否定した。つまり、オリンピックに参加した選手には、メキシコの歴史の重要な要素である先住民がなく、メキシコの過去とつながりがないことを指摘している。したがって、メキシコの歴史を持っていない選手には、ユニフォームを着る誇りもないと結論する。

### c. 最小限化

最後に、最小限化という戦略について説明したい。これを最も象徴するのがポチョという差別用語の使用である（ポチョは男性名刺であるが、女性名詞の場合はポチャとなる）。この状況を表すのが、COMの公式アカウントに投稿した以下のコメントである。

#### コメント 18

JNS: Solo fueron a pasear las pochitas ja ja

[このポチャたちは、遊びに行っただけだね、は、は]

#### コメント 19

SLM: Ya no vuelvan a seleccionar pochos y no mexicanos (que no sientan México) prefiero perder con mujeres mexicanas que estas cosas...

vergüenza mundial su estupidez

[二度とポチョと非メキシコ人（メキシコのことを感じない）を選ばな。こんなのよりも、メキシコ人女性で負けた方がまだね（…）世界的な恥だね、彼女たちのアホな行動は]

コメント 18 の場合、ユーザーは「pochitas」という指小名詞を使い、コメント 19 では、ユーザーは「estas cosas」（こんなの）という言葉を使用している。どちらの場合でも、選手を最小限化し、二重国籍戦選手のメキシコ人としてのアイデンティティを否定する言説的戦略を使用している。

ちなみに、コメント 18 は、銅メダル決定試合のカナダ戦における敗退直後に投稿したものであり、敗北に納得できなかった結果であったと言える。一方、コメント 19 は、ユニフォームのスキャンダルが発覚した後に投稿したものである。ユニフォームを捨てることは愛国心の象徴に対する侮辱とみなされものである。したがって、そのような行動は、価値、歴史、文化を共有する共同体のメンバーが期待していない行動であった。

## (5) 考 察

メキシコでは長年間、マスメディアがスポーツにおけるナショナリズムの表現を構築してきた。その結果、不必要な論争をおおるだけでなく、商業的な利益のために国民共同体を象徴するアイコン、ナショナルカラー、ステレオタイプのイメージを再生産してきた (Hernández Gutiérrez, 2009)。しかし、現在では SNS の普及により、国民共同体の想像が水平的な構造を持っている。つまり、ナショナリズムの形成にメディアはまだ関与しているが、今まで受け身の形であった「一般人」も関与することが可能になった。これが正に COM のツイッターの公式

<sup>4</sup>この民族衣装の呼称は地域によって違う。メキシコ全体では、ナワトル語を起源とするウイピル [huipil] と呼んでいるが、ユカタンではイピル [hipil] という単語を使っている。

アカウントで起きた現象である。

COMの公式アカウントに投稿したコメントを分析すると、ユーザーは、選手に対して、メッセージや励ましのコールなどを投稿し、メキシコという想像上の国民共同体を呼び起こした。これはピリッグが定義する国民共同体の旗を振ったことを意味する。したがって、ユーザーは、スポーツ・ナショナリズムの表現を自分のものにした。しかもメディアよりも先に配信していた。

数あるメッセージの中には、異なった意見が存在し、それぞれが言語的に国民共同体を形成した。まず、ソフトボール代表チームをメキシコの代表として認識したユーザーが存在した。彼らにとって二重国籍選手は、勇気、粘り強さ、冷静さ、強敵に向かう強い姿勢など、ポジティブな特徴を持ち、オリンピックという物語の理想的な登場人物として構築した。しかも、ユーザーたちは互いのスポーツ・ナショナリズムの表現を交換し、共に勇敢な選手たちの活躍を語ることができた。結局、ユニフォームのスキヤンダルの前にしても、二重国籍選手をメキシコの代表として受け入れた。

一方、ソフトボール代表チームをメキシコの代表ではないと認識したユーザーが存在した。彼らにとって二重国籍選手が拒絶する主体である。そして「真のメキシコ人」の条件としてスペイン語を話す、メキシコで生まれ、同じ歴史を共有することを重視した。しかも、多くのユーザーは二重国籍選手の美德を否定し、指小名詞の使用を通じて選手を最小限化した。また、ポチャスという差別用語を使い、先住民の過去を代表している人物と対比することで、二重国籍選手を他者として分類した。さらに、ユーザーは選手が国民共同体を犠牲にする御都合主義的な主体として定義した。

このように、日常のナショナリズムの表現に注目すると、憲法上で選手がメキシコ人であり、アスリートとして優れた能力を持っていても、スペイン語が話せないという理由だけで拒絶反応が起きた。メキシコ人が誰であるかを決める上で、これは非常に狭い論理である。しかも、ニュアンスの違いを受け入れる余地がないため、メキシコのスポーツ・ナショナリズムのみならず、日常の

ナショナリズムも外国人嫌いとは排他主義に向かっていることを示していることになる。

## むすびにかえて

2020年の東京大会で、メキシコ的女子ソフトボール代表チームは史上初のオリンピック参加を果たした。そのほとんどが二重国籍選手であり、彼女たちのメキシコという国民共同体への帰属がSNS上で大きな論争を巻き起こした。本研究は、その表現の談話分析を行い、ユーザーがどのようにメキシコ人の素質をとらえているのかを明らかにした。その結果、分析したコメントを見る限り、2つのナショナリズムの表現が表面化した。1つは包括的で基準が緩い寛容的なナショナリズムである。もう1つは、国土、言語、歴史のつながりを非常に重要視する排他的なナショナリズムである。そしてSNS上では、後者の存在がまだ強く残り、多くのユーザーは女子代表チームを国民共同体から除外した。

なお、今回の事例で、大きな問題となったのがユニフォームのスキヤンダルである。ボウズとベアナーが指摘するように、ユニフォームは単なる衣服ではなく国民共同体のシンボルであり、一般的に言えば、一定の敬意を払うべきものである (Bowes and Bairner, 2019)。したがって、多くのユーザーがゴミ箱にユニフォームを捨てた行為を見て二重国籍選手を「真のメキシコ人」ではないと定義したことは理解できる。

本研究は二重国籍選手の行為を支持するものではないが、荷物が多くてスーツケースに入らなかったというFMSの説明には説得力がないと考えている。これはあくまでも推測であるが、SNS上での差別発言を見た選手がカナダに敗北を喫した後、嫌気が差してユニフォームを捨てたのかもしれない。いずれにせよ、SNS上ではミソジニーの発言が多く、改めてメキシコ社会における女性差別を浮き彫りにしたのは事実である。その意味で、ボウズとベアナーが指摘するように、スポーツの空間は本質的に男性的である (Bowes and Bairner, 2019: 6)。こ

の点は、本稿の研究対象を超えた問題であるが、今後の課題にしたい。最後に、メキシコにおける日常のナショナリズムの分析はまだ十分ではないが、本研究のアプローチを用いることで、さらなる研究の発展が期待できる。

## 謝 辞

本研究の執筆にあたり、特に日本語の校正において東京大学の宮地隆廣氏と自然環境研究センターの菊池しゅき氏に大変お世話になった。心より厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

### 英語

- Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities. Reflections on the Origins and Spread of Nationalism*, Revised Edition. London: Verso.
- Billig, Michael. 1995. *Banal Nationalism*. London: Sage Publications.
- Bowes, Ali and Alan Bairner. 2019. “Three Lions on Her Shirt: Hot and Banal Nationalism for England’s Sportswomen.” *Journal of Sports and Social Issues* 43, no. 6: 531-550.
- Edensor, Tim. 2002. *National Identity, Popular Culture and Everyday Life*. Oxford: Berg.
- Renan, Ernest. “What is a Nation?”. In *Nation and Narration*, edited by Homi Bhabha. London: Routledge: 8-22.
- Szulc, Lukasz. 2017. “Banal Nationalism in the Internet Age: Rethinking the Relationship between Nations, Nationalism and the Media.” In *Everyday Nationhood: Theorising Culture, Identity and Belonging after Banal Nationalism*, edited by Michael Skey and Marco Antonsich. London: Palgrave Macmillan: 53-75.
- Cámara de Diputados. 2022. *Constitución Política de los Estados Unidos Mexicanos*. <https://www.diputados.gob.mx/LeyesBiblio/pdf/CPEUM.pdf> (2023. 1. 5 アクセス).
- Campos Garza, Luciano. 2014. “Rayados y Tigres plagados de jugadores naturalizados.” *Revista Proceso* <https://www.proceso.com.mx/deportes/2014/4/18/rayados-tigres-plagados-de-jugadores-naturalizados-131584.html> (2023. 1. 5 アクセス).
- , 2017. “Desigualdad en LMB compromete permanencia de equipos: Magdaleno.” <https://www.proceso.com.mx/deportes/2017/1/12/desigualdad-en-lmb-compromete-permanencia-de-equipos-magdaleno-176961.html> (2023. 1. 5 アクセス).
- Carrillo Reveles, Veremundo. 2016. “Fútbol, nacionalismo y xenofobia en México: debates en la prensa sobre los jugadores extranjeros y naturalizados, 1943-1945,” *Desacatos*, no. 51: 50-69.
- Hernández Gutiérrez, Carlos. 2009. “Ponte la verde con el tri de mi corazón: nacionalismo banal, televisión y fútbol.” *Razón y Palabra*, no. 69.
- O’Farrill, Israel. 2010. “Nacionalismo mexicano, algunas aproximaciones.” *Athenea Digital*, no. 19: 213-225.
- Pereyra, Beatriz. 2021. “Selección mexicana de softbol femenino: del rechazo a los Juegos Olímpicos.” *Revista Proceso* <https://www.proceso.com.mx/deportes/2021/7/20/seleccion-mexicana->

### スペイン語



de-softbol-femenil-del-rechazo-los-juegos-olimpicos-268189.html (2023.1.5 アクセス).

Redacción, 2021. “Jugadoras mexicanas de softbol tiraron sus uniformes a la basura. Las boxeadoras mexicanas Brianda Tamara Cruz y Esmeralda Falcón publicaron en sus redes sociales las imágenes de los uniformes desechados, y que fueron entregados por el Comité Olímpico Mexicano.” *Revista Proceso*, <https://www.proceso.com.mx/deportes/2021/7/29/jugadoras-mexicanas-de-softbol-tiraron-sus-uniformes-la-basura-268772.html> (2023.1.5 アクセス).

identity on social media and in relation to the outside world.

**Keywords:** Mexico, nationalism, discourse analysis, dual nationality, softball

## 日本語

吉野孝・山崎眞次編 (2022) 『北米移民メキシコ人のコミュニティ形成』東信堂。

## Abstract

For the first time in history, a Mexican women’s national softball team participated in the Tokyo 2020 Olympic Games. Most of the team’s players had dual nationality. Initially, the domestic media did not pay attention to the event, but many Mexican social media users supported the national team. This paper conducted a discourse analysis of the comments posted by users on the official Twitter account of the Mexican Olympic Committee, focusing on the controversy surrounding the nature of the team’s dual nationality. The research identified two contrasting expressions of nationalism: one group accepted the dual nationality athletes and viewed them as a source of pride for their country, and the other rejected them and held a clearly xenophobic position. Both expressions of nationalism were examples of everyday nationalism (banal nationalism), as users defined their self-